掲載日:2015年07月31日，面名:社会，記事ID:KIJ20150731_01003000100205005
(C)下野新聞社

「命の大切さ」語り継ぐ

ヒロシマ講座 被爆体験伝承者

母の思い、娘が伝える

とちぎ戦後70年 広島から

広島市の被爆の実態などを学ぶ国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」3日目の30日、同市の「被爆体験伝承者養成事業」に参加する被爆体験証言者と伝承者、伝承候補者の3人が会場の広島国際会議場でそれぞれの思いを話した。事業は、「第三者」が体験者の証言を基に被爆を語り継ぐ試み。「どうやって人の心を伝えるのか」と疑問を感じていた証言者の梶本淑子さん（84）は、伝承者が活動する姿を通して、自身の声や思いが後世に伝わる手応えを感じたと語った。

「梶本さんは爆心地から2・3キロ北にあった工場で作業中に被爆しました。当時は14歳で、今の中学3年生。その日は…」

3年間の養成課程を終えた伝承者大田孝由さん（68）は、受講する記者を前に身ぶりを交えて語った。

被爆2世で、奈良県在住の元教師。伝承者養成事業が始まった2012年度に応募した。「母親が亡くなり60歳を過ぎた頃から人生を振り返り、故郷への気持ちが強くなった」という。

70年前のあの日、梶本さんの父は娘を捜して広島市内を歩き回り、その1年後に亡くなった。梶本さんは、自身がけがをしながらも担架で友人を運んだ。その姿を思い浮かべながら、大田さんは「（伝承で）命の大切さを伝えていきたい」と力を込めた。

4月時点で、全国の16～81歳の210人が被爆者の証言を聴くなど研修を重ねる。既に1期生（12年度）50人は伝承活動を始めた。

伝承候補者の中村裕美さん（55）は、梶本さんの次女。3期生（14年度）として研修を続けている。梶本さんは、1期生に体験を伝えた後は事業への参加を辞めようと思っていたというが、娘の参加で、「（伝承のために）あと3年は生きなくては」と笑顔を見せた。

梶本さんの願いは戦争反対と命を大切にする心。母親の姿を見て事業に応募した中村さんは被爆者、そして母親の声を後世に伝える。

（横松敏史）

命の尊さを伝えたいと語る（左から）梶本さんと大田さん、中村さん＝30日午前、広島市内